



ぼうらん

Luisia teres Bl.

紀伊半島から西、殊に九州辺でハゼ等の落葉樹に着生している蘭。高さ30cm内外、時に懸垂する。茎は針金様、緑色の葉鞘が覆って見えない。葉は長さ10cm内外、径4mm許りの細い円柱形で硬肉質、暗緑色、向軸側が浅くくぼむ。発芽後の株では左右扁圧で剣状。花は6-7月頃、1-5花の短かい総状花序を腋生、通常葉鞘を破って葉身の下に出る。花は径1cm、横向、黄緑色、悪臭あり、花蓋片5片は狭長楕円で円頭、内片は若干長く、唇弁は長さ12mm位の楕円形、紫黒色で下垂、基部側方と前縁両側に小耳片がある。花粉塊は蠟質で2個、粘着体は横向きの楕円形で大きい。和名は棒蘭で、葉の形状による。



かとれあ

一名ひのでらん

Cattleya labiata Lindl.

温室に栽培する大輪の蘭の1種。細かい種類が多数記載され、なおその間の交雑が多い上に、近縁の Laelia との交雑種さえあり、個体毎に差があり、種の決定は容易でないが、南米ギアナからブラジル東南部に亘って自生する広義の本種が基準となっているとみてよい。偽鱗茎は少々押しつぶれた棒状で、葉の鞘がそれを巻き、20cm長前後、草質の光沢ある葉を1個つける。花2-3、頂生し、径10-15cm、桃色から紫色系、花弁は萼片より広く、縁が縮れる。唇弁は蕊柱を巻き、縁は濃色、内部の地色は淡色、大小の黄斑がある。花粉塊は蠟質で4個。



まやらん

Cymbidium nipponicum Makino
(=Pachyrhizanthus nipponicum Nakai)

南関東以西の各地の林下に散発的に発生を見る無葉の菌根蘭、地下茎は太さ数mm、肉質紐状で分岐し関節明瞭多年生、数年つづけて盛夏に高さ10-25cmの花茎を先端から出す。花梗は瘦せて硬く淡黄色、花序は総状で2-5花、花径3-4cm内外。花蓋片は瘦せて披針状楕円形で尖り、端正の感あり、うるんだ白色から淡紅色、時に黄色化もみられる。内片は外片よりも巾広く、下半部の中央に近く唇弁と同様の畝が1-2本、時にないこともある。唇弁は軽く反り且つ中央下部で多少くびれ、中央に2条の畝が明瞭、蕊柱はシュンランに似る。和名は兵庫県摩耶山で最初の産地。

Cymbidium Dayanum Rchb. fil.
(=C. Simonsianum King et Pantl.)

印度アッサムからマライ諸島にかけて生ずる常緑の蘭で、古く日本にも入り、時々稀に栽培される。株は叢生し、葉は30-50cmの広線形で柔軟、草質、中脈のみ目立つ。先端は漸尖。冬に株の基部から白味勝ちの膜質苞を重ねた花序が出て、時に長さ30cm、上部軽く垂れ、白〜淡紅紫花を開く。花蓋片は狭倒披針形、長さ3cm許、内面中央に濃紫色の長い斑がある。唇弁は濃紫色、中央部は黄色、側裂片は広く蕊柱を抱え、中央裂片は強く反捲、二つの畝が高い。蕊柱は紫黒色、香気がない。和名は寒鳳蘭で寒中に咲く鳳蘭の意。南九州から琉球に少々小形の変種ヘツカラ var. austro-japonicum Tuyama あり。



みやまむぎらん

Bulbophyllum japonicum Makino

中部以西の暖地の少々深山にみる着生常緑蘭、細い根茎が露出して横走し、これに卵球形、緑褐色の偽鱗茎がつく。径6mm内外で1葉宛着生。葉は披針状楕円形で薄革質、硬くなく又先が鋭尖する。盛夏に球の横に、球の4-5倍長の瘠せた花茎を出し、頂に2-3花が輪生する。暗紅紫色で径1cm許、側方の外花蓋片が上片より遙かに長く尖り、且つ先端が始め接着している。側方内片は縁に毛がない。唇弁は関節し紫黒、肉質で舌状に反捲し、先端は球状に膨れる。蕊柱の先には両端に角状突起がある。



こうきせっこく

一名でんどうびゅうむ

Dendrobium nobile Lindl.

温室に最も普通に栽培する多年生の蘭。原産はヒマラヤから雲南。高さ30-50cm、茎は2-3本叢生し、高くなると屢々倒れる。肉質で汚緑色、節間は2cm内外で比較的短かく、葉鞘が白茶色にこれを半ば包む。葉は線状披針形長さ8cm内外、薄手の草質、2年を経て落葉する。花は12月から7月に亘り、茎の上半部に各節から短かい総状花序をなして2-3花をつける。花径7cm許り、花蓋片は開出し、倒卵状楕円形で肉質、上半部は桃〜紅紫色、基部に向えば淡色、唇弁は蕊柱を円く囲み、先端短かく尖り、中央に大きく暗紫斑がある。和名は高貴石斛で、学名の直訳で大正2年著者の命名。

